

昭和48年1月13日第三種郵便認可

HSK通巻504号

発行日/2014年3月10日(毎月10日発行)

編集人/白老町手をつなぐ育成会 佐藤春光

北海道白老郡白老町字萩野310-110

TEL(0144)83-3537

会報/210

発行人/北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK)

定価/1部100円(会費を含む)

HSK

2014. 3月号

ほほえみ



白老町手をつなぐ育成会

親の自立と子の自立

ホーム『そよ風』が出来てから、「グループホームに入りたいのですが」そんな声が何人かから上がりました。20歳になると成人を祝います。独り立ちの節目なのです。健全児と言われるほとんどの子ども達は18歳で親元を離れ、進学にしても就職にしても一人で生活することになります。そこから、直接的な親の庇護を離れ、独り立ち＝自立が精神的にも肉体的にも始まるのです。

子どもに障がいがあると、いつの間にかわが子は自立できないと思い込んで、家庭での囲い込みになってしまいがちです。一人での生活が無理でも、グループホーム等を活用して親から離れて自立への準備をさせた方が、親離れ子離れできると思います。

「うちの子どもは自立は無理です」という前に、どんな条件がそろえば無理でないのか、どうすれば自立に向かって歩けるのか考えてみたいものです。それが育成会が存在する意味ですし、私たちが作業所やグループホームを作ってきた意味でもあるのです。

もしかしたら、いつの間にか親自身が『子離れ』出来なくなってしまったのかも知れません。『子の自立』それは以外と『親の自立』なのかも知れません。

30歳になっても40歳になっても親も子ども動きません。子が50歳になる頃は親は70歳・80歳です。子どもそろそろ高齢化が始まります。知的障がい者の老化現象は早く始まるのです。いよいよ身動きがとれなくなってきたとき『この子より1日でも長く生きたい』というかなわぬ願望が出てくるのです。

今まで、『この子より1日でも長く生きたい』という言葉は、親の愛情の深さとして言われて来たように思います。しかし、この頃は、わが子の自立が準備できなかった親の弁解に聞こえて来るようになりました。これからの時代は、『親はなくとも子は育つ』様にすることが親の努めの様な気がします。

森づくり・人づくり

障がい者の自立に新たなアプローチ

NPO法人栗山町手をつなぐ育成会『ワークセンター栗の木』では、障がい者の自立を目標に、自家製粉で「福祉のパン」作りをはじめ、付加価値の高い商品開発をしながら運営していますが、自立できるだけの賃金には届いていない現状です。

この講座では「ワークセンター栗の木」の坂本 武所長から、ワークセンター栗の木の運営と前の職での経験をもとに、どうすれば知的障がい者の経済的自立を促進できるかなどについて考えます。

日時 平成26年3月29日(土) 13:30～

場所 かでる2・7(道民活動センター730研修室)

参加費 無料

※ 申込みはフロンティアまで(電話0144-83-3537)

胆振地区育成会会員研修会に参加

2月15日の土曜日、登別で開催された胆振地区手をつなぐ育成会連絡協議会が主催する研修会に、白老から5名の会員が参加してきました。

午前の部は、「地域で幸せに暮らすために、今親ができること～ライフステージに合わせた子育てのヒント～」という演題で北海道発達障害支援センターあおいそらコーディネーターの片山智博さんの講演でした。

片山さんの講演内容は、文字通りライフステージに合わせた障がい者支援のヒントが満載のお話でした。とても良いお話しを聞くことができたので、全部を伝えることはできませんが、少しでも子育てや支援の仕方の参考になるのではと思います。要旨を紹介します。

青年成人期になっても支援が非常に難しい状況にある人もいますが、それは多くの場合本人のせいではなく、今までの様々な関わりのまずさから引き起こされた二次障がいと言うべきものです。それではどうして二次障がいを起こしてしまうのかと言えば、大人との信頼関係を築く経験が、成育の中で少なかった結果なのです。

- ・きちんと認めてもらった経験
- ・きちんとほめてもらった経験
- ・わかるように教えてもらった経験
- ・一貫して関わってもらっているという実感
- ・安心できる相手という実感

親は子どものためにずっと頑張ってきたし、支援者も同じだと思うのです。しかし、なぜそうなっているのか、それは親や支援者の思いが通じていないからです。なぜ通じていないのか、それは自閉症の子どもは、コミュニケーション能力や対人関係に課題を抱える障がいだからです。人の関わりも含めて周囲の状況を理解することが苦手な障がいだからです。子どものためにと頑張って働きかけても、そのことがそのように受け止めることができない障がいなのです。

まずは違いを知ることが親にも支援者にも求められます。彼らの情報の受け止め方・理解の仕方・記憶の仕方・判断の仕方・注目の仕方・興味の持ち方・学習の仕方などの特徴を知らなければ、すれ違いは続くのです。(後略)

※ この続きを知りたい方は、事務局の国本までご一報下さい。

一般家庭家電募集

今フロンティアでは、パソコン等小型家電の分解を作業の中に取り入れてやっています。他の仕事ではなかなか集中できなかった利用者がいたのですが、分解をやってもらうと集中して取り組める事がわかりました。最初フロンティアの壊れた物や職員に持ってきてもらったのですが、もう品切れです。パソコン、ステレオ、ビデオデッキ等その他リサイクル法で規制されている物以外であれば何でもOKです。待っています。

春よこい(来・鯉・恋)

道路の雪は →
とけています

送迎用 →
マイクロバス

ハウスの中は
冬でもぼかぼか



第5回役員会開催

2月6日、氷で凸凹している悪路の中を12名の出席で役員会を開催しました。前半は1月18日に実施した3団体合同の新年会の反省をしました。昨年から取り組んでいる、各親の会の活動紹介は、今回は会が始まった中で行ったので去年よりみんなが集中できて良かったという意見がありました。

また、当日会場が寒かったということでしたので、今後はもっと早めに会場を借りるようにしたいと思います。また、今年初めて用意したヨーヨーコーナーは、子ども達にとても好評でした。しかし、会が終わった後の片付けで、テーブルクロスのたたみ方が雑で、教育委員会より苦情がありましたので、次年度は気をつけたいと思います。

続いて、新年度の「春のバス遠足」「夏の療育キャンプ」の目的地、宿泊先、日時等の検討をしました。春のバス遠足は、5月10日の土曜日に実施することになりました。夏の療育キャンプの目的地は、夕張方面で7月19日～20日の土・日で計画を進めることになりました。

家から通える 養護学校

いま 欲しいもの

17万都市の
機能点検

⑥

苫小牧市の予算書に「週末帰宅用送迎バス運行事業補助。130万円」との記載がある。市内からバスで1時間ほどの道立平取養護学校の寄宿舎で生活する子供が、週末ごとに市内の自宅に戻ることを支援するものだ。補助は2003年度、年100万円です。08年度から現在の額となった。苫小牧に養護学校はなく、同校に市内の子供が増えたことが背景にある。

同校は78年開校。知的障害、重複障害が対象で、98年度には高等部も置かれた。小学、中学も合わせた計3部に現在、東胆振と日高の74人が在籍。その8割が苫小牧の児童生徒で、大半が併設の寄宿舎で暮らす。教員は54人。教員1人当たりの児童生徒数は1.4人で、市内各小中学校にある特別支援学級の同2.5人に比べ、条件は良い。

市の調べでは、現在、市内の小中学校の特別支援学級に通っている107人のうち、本来、養護学校で教育を受けることが適切なものの、食事制限や薬の服用などから寄宿舎生活が困難なことや、家

東胆振と日高管内の74人が在籍する道立平取養護学校。約8割が苫小牧市内の児童生徒だ



平取校の8割、市内から 「特別支援」より環境充実

族との生活を希望するなどの理由から、平取養護学校に籍を置かない児童生徒は50人以上にいるという。

「せめて養護学校の分校があれば」。市内の小学校の特別支援学級に子供を通わせる40代女性は

絞り出すような声で語る。「子供は知的障害と併せて先天性心疾患がある。けがを見逃し感染症になったら命の危険もあり、親が毎日見守らなくては。通える場所なら良かったのですが」。泣く泣く養護学校への入学を断念したが、その手厚い体制がうらやましく思うという。

別支援学級の先生も頑張っているが、やはり子供の成長が全然違うように思える」と話す。

実は、道教委は当初、養護学校を苫小牧に設ける意向だったが、市側が断り、平取町が手を挙げた歴史的な経緯があり、これが事態を複雑にしている面もある。子供たちが置かれた現状とは無関係に、いまさら、設置を道教委に頼めるのかという「大人の事情」だ。

平取の小学部なら、国語や算数をはじめ、着替えや給食の片付けなど日常生活の指導も行う。学年や教科単位の職員会議が毎日のように開かれ、「子供がどんな状態か」「どう言葉をかけるべきか」などを確認している。

市内への設置を要望し続けているが、過去の経緯から、分校設置案も浮かぶ。ただ、市内に分校ができれば、平取からの大量転校も想定される。道教委は「平取の人数が減ると統廃合問題にもなる。どの地域にも養護学校があるのが望ましいが、学校規模を考えると広域化は不可避」と話す。

同じく特別支援学級に子供を通わせる別の母親は、かつて見学した養護学校の授業に感銘した。教員がさまざまな研修を受け、障害の程度に応じ指導していた。子供が長い人生を送るため、多くのことを学ぶ大事な期間。本当はより充実した環境に置きたい。

小学校は特別支援学級で、中学から平取にしたという母親は「特

ある母親は「障害の程度や種類は千差万別。養護学校が特別支援学級か、さらには寄宿舎か通学か、選べるのが一番」と、切実な思いを語る。

ふろんていあ♡メール
Frontier

通所授産施設
フロンティア♡MAIL

2014年3月号

〒059-0922
白老町萩野 310-110
TEL・FAX0144-83-3537

2月28日（金）フロンティアにて料理教室を行ないました。

町内の5名の方々に料理を教わりました、豚汁、おにぎり、くだもの作りお昼にみんなで、いただきました。とってもおいしくて、たくさんの方がおかわりをしました。ごちそう様でした、そして料理をご指導いただきありがとうございました。



バス 納車になりました



3月から、いよいよバスで送迎開始です

みんな、楽しみにしていたので、わくわく
していました。野中君は、うれしいと、

なんども言っていましたよ。





HSK ほほえみ

昭和48年1月13日 第三種郵便物認可
発行日 2014年3月10日発行(毎月10日発行)
HSK通巻番号504号
編集人/北海道白老郡白老町字萩野310-110
白老町手をつなぐ育成会 佐藤 春光
TEL 0144-83-3537
会報/210号
発行人/北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK)
定価/1部100円(会費に含む)